

158 08 158

シベリア開発と
北洋漁業

S9-9



シベリア開発と
北洋漁業

望月 喜市 編

シベリア開発と
北洋漁業

定価 一八〇〇円

昭和五十七年四月二十日印刷
昭和五十七年四月三十日発行

編者 望月喜市

発行者 武田圭策

発行所 北海道新聞社

〒060-191

札幌市中央区大通西三丁目

電話(〇一一)二二二—二二二—

振替 小樽二八三九八

印刷所 興国印刷株式会社

1080-23117-7806

目

次

第一部 シベリア開発—開けゆく大地—

第一章 開発への総合アプローチ …………… 望月 喜市 14

I シベリア・極東の自然

II よみがえる大地

III シベリア・極東開発の現状と展望

IV 開発の組織・体制

第二章 バイカル・アムール鉄道 …………… 仲 弘 49

—ソ連極東開発へのアプローチ—

I バム鉄道とは

II 帝政時代のバム鉄道論議

III ソビエト期のバム鉄道論議

IV バムの現況

V バムの将来

第三章 シベリア開発をめぐる自然条件と人間 …………… 方波見雅夫 72

I シベリア開発と人口問題

II 労働力の吸引と定着対策

- III 自然条件、特に酷寒への適応
- IV シベリア開発と医学とのかかわり
- V 人間と開発との接点―「医学地理学」
- VI “住みよいシベリア”への転換へ向けて

第四章 シベリアの労働力と生活条件……………

望月 喜市 92

- I 人口の分布と移動
- II 労働移動の原因
- III 生活条件の改善

第五章 シベリア開発の最前線から……………

白井 久也 114

- I 石炭の宝庫―南ヤクト
- II シベリアの巨人―サヤン水力発電所
- III 最大の油田地帯―チュメニ
- IV 開発の頭脳センター―ノヴォシビルスク

第二部 シベリアと外部世界

第一章 シベリアの資源と世界経済……………

小川 和男 134

第二章

シベリア開発と日ソ経済関係……………

鈴木 啓介 161

—わが国の対応をめぐって—

- I プロジェクト貿易の出現
 - II 日ソ双方の問題点
 - III 履行されるプロジェクト
 - IV 資源がらみと、そうでないもの
 - V 資源開発型の協力に重点
 - VI シェア、シェアというが
 - VII 流動的だが、着実に
-
- I ソ連（シベリア）の資源の世界的意義
 - II ソ連の天然資源とシベリアへの集中
 - III ソ連の資源開発の難題増幅
 - IV シベリアの資源開発の国際化
-
- I 北方圏のなかのシベリア
 - II 北海道とシベリアの経済交流
 - III 北海道の対ソ貿易

第三章

シベリア開発と北海道経済……………

山中 文夫 178

第三部 北洋漁業と日ソ協力

序章 北洋漁業とは……………

工藤 勲 202

第一章 戦前北洋漁業の開発と発展……………

工藤 勲 205

I 北洋漁業のはじまり

II 露領漁業の発展

III ロシア革命と母船式漁業の発達

IV 北洋底魚漁業の発達

V 北洋漁業の黄金時代

VI 日魯漁業独占の成立

VII 北洋漁業の性格と意義

第二章 北洋サケ・マス漁業の再開と再編成……………

工藤 勲 212

I 以南サケ・マス漁業の確立

II 母船式サケ・マス漁業の再開

IV 北海道貿易公社の設立とプロジェクト貿易の推進

V サハリン天然ガスの導入

VI むすび

III	暫定的自発的抑止線の設定	
IV	二つの規制ライン	
V	北洋サケ・マス禁漁区域の拡大	
VI	規制漁獲量の激減と漁獲配分	
VII	公海漁業の規制と大幅減船	
	第三章 日ソ漁業条約と国際的潮流	鈴木 旭
	I	ブルガーニン・ラインの設定
	II	ブルガーニン・ラインに対する国内反響
	III	公海漁業規制の国際的潮流
	IV	日ソ漁業条約の国際的地位
	V	日ソ漁業条約の適用と資源評価
	VI	大陸棚資源の主権化

	第四章 二〇〇カイリ体制下の北洋漁業	鈴木 旭
	I	二〇〇カイリ体制下の日ソ漁業関係
	II	「新協定」下の北洋漁業の展望

	第五章 日ソ漁業共同事業	池田 均
--	--------------	------

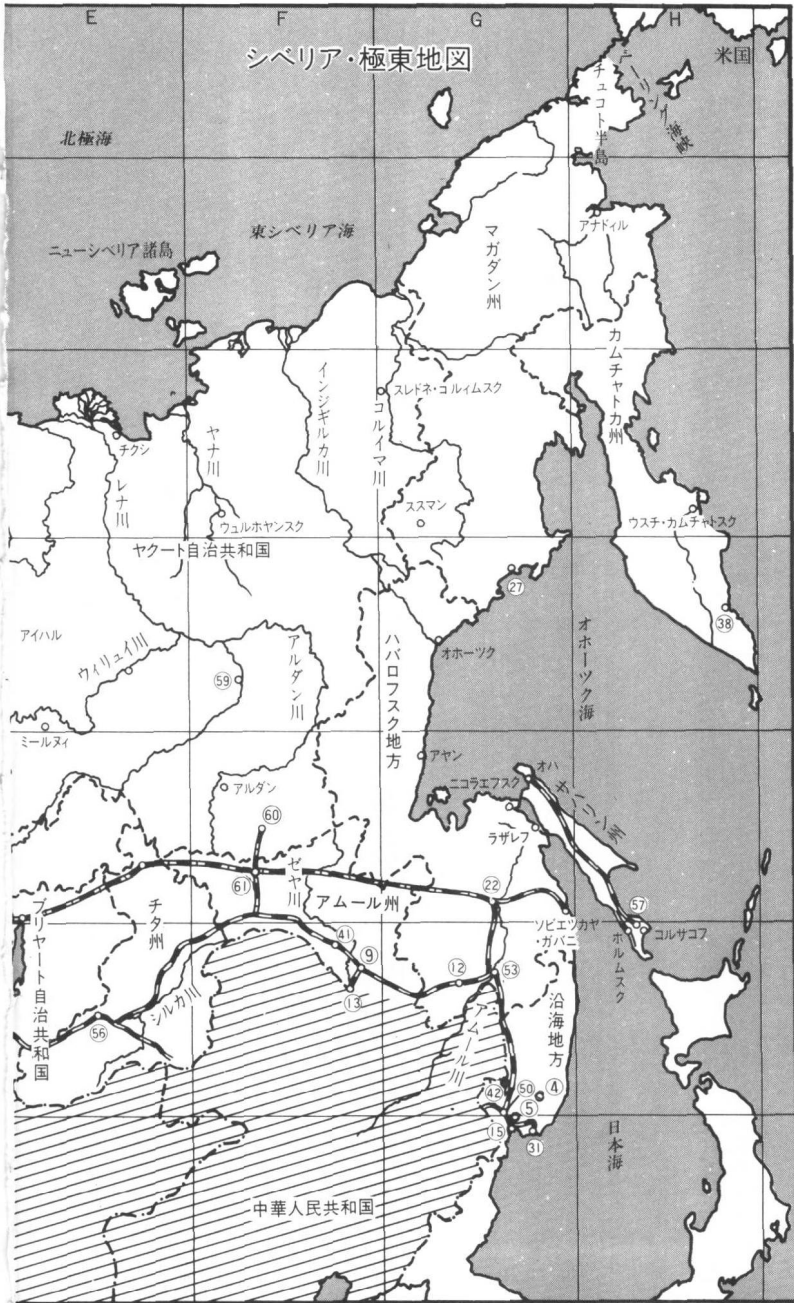
第四部 資料 編

- I 日ソ漁業共同事業の経過
- II 日ソ漁業共同事業の実態
- III 問題点と今後の見通し

一 補論・シベリア燃料開発の経済計算	望月 喜市	272
二 シベリア開発年表		283
三 日ソ・シベリア開発協力プロジェクトの進捗状況		300
四 シベリア開発参考文献		307
あとがき		318

装幀 浪内 一雄

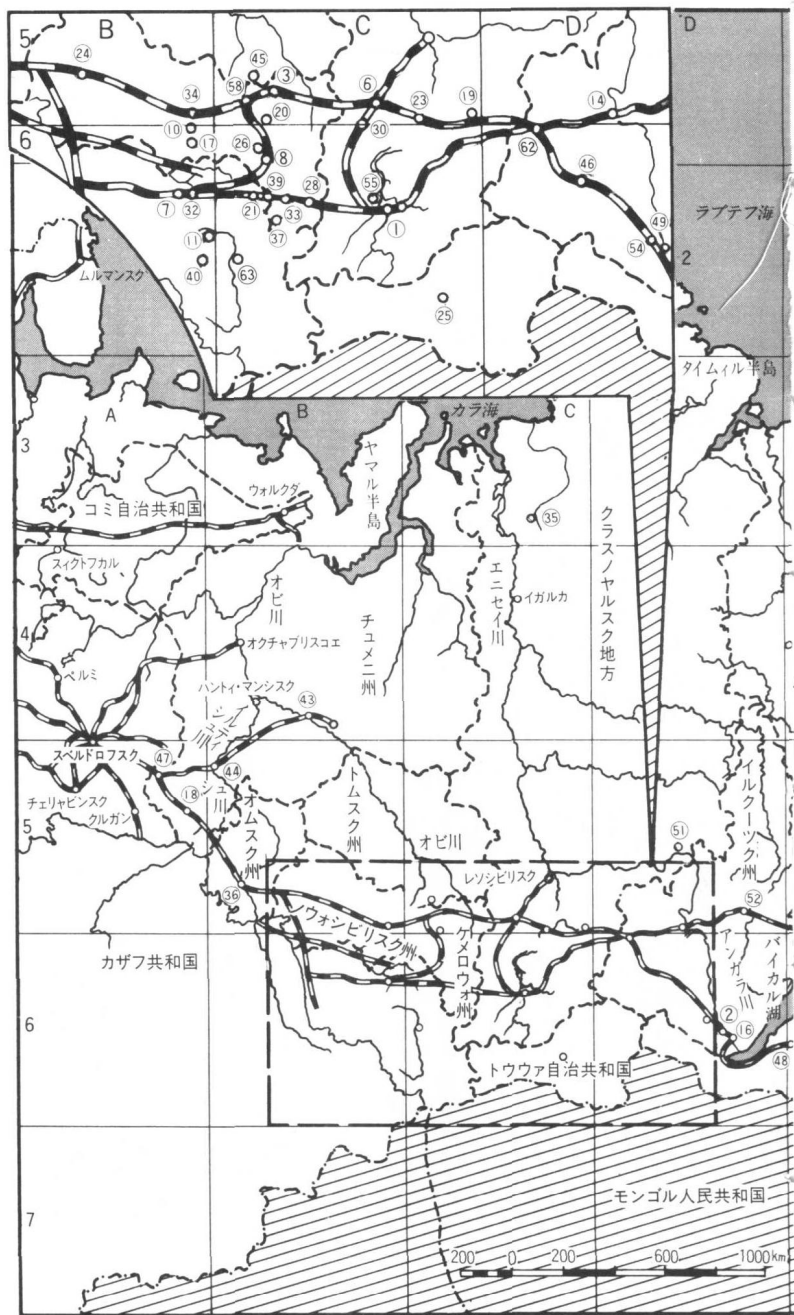
シベリア・極東地図



- ③① ナホトカ (7G)
- ③② ノボアルタイスク (6B)
- ③③ ノボクズネツク (6C)
- ③④ ノボシビルスク (5B)
- ③⑤ ノリリスク (4C)
- ③⑥ オムスク (5B)
- ③⑦ オシンニキ (6C)
- ③⑧ ベトロパロフスク・カムチャツキー (4H)
- ③⑨ プロコピエフスク (6C)
- ③⑩ ルプツォフスク (6B)
- ④① スバボードヌイ (6F)
- ④② スパフスク・ダリーニ (6G)
- ④③ スルグート (4B)
- ④④ トボリスク (5B)
- ④⑤ トムスク (5C)
- ④⑥ トウルーン (6D)
- ④⑦ チュメニ (5A)
- ④⑧ ウランウデ (6E)
- ④⑨ ウソリーエ・シベリスコエ
- ⑤⑩ ウスリースク (6G) (6D)
- ⑤① ウスチ・イリムスク (5D)
- ⑤② ウスチ・クート (5D)
- ⑤③ ハバロフスク (6G)
- ⑤④ チエレムホボ (6D)
- ⑤⑤ チエルノゴルスク (6C)
- ⑤⑥ チタ (6E)
- ⑤⑦ ユジノサハリンスク (6H)
- ⑤⑧ ユルガ (5C)
- ⑤⑨ ヤクーツク (4F)
- ⑥⑩ ベルカキッド
チェリマン (5F)
- ⑥① ティンダ (5F)
- ⑥② タイシエット (5.6D)
- ⑥③ ゴルノアルタイスク (6C)

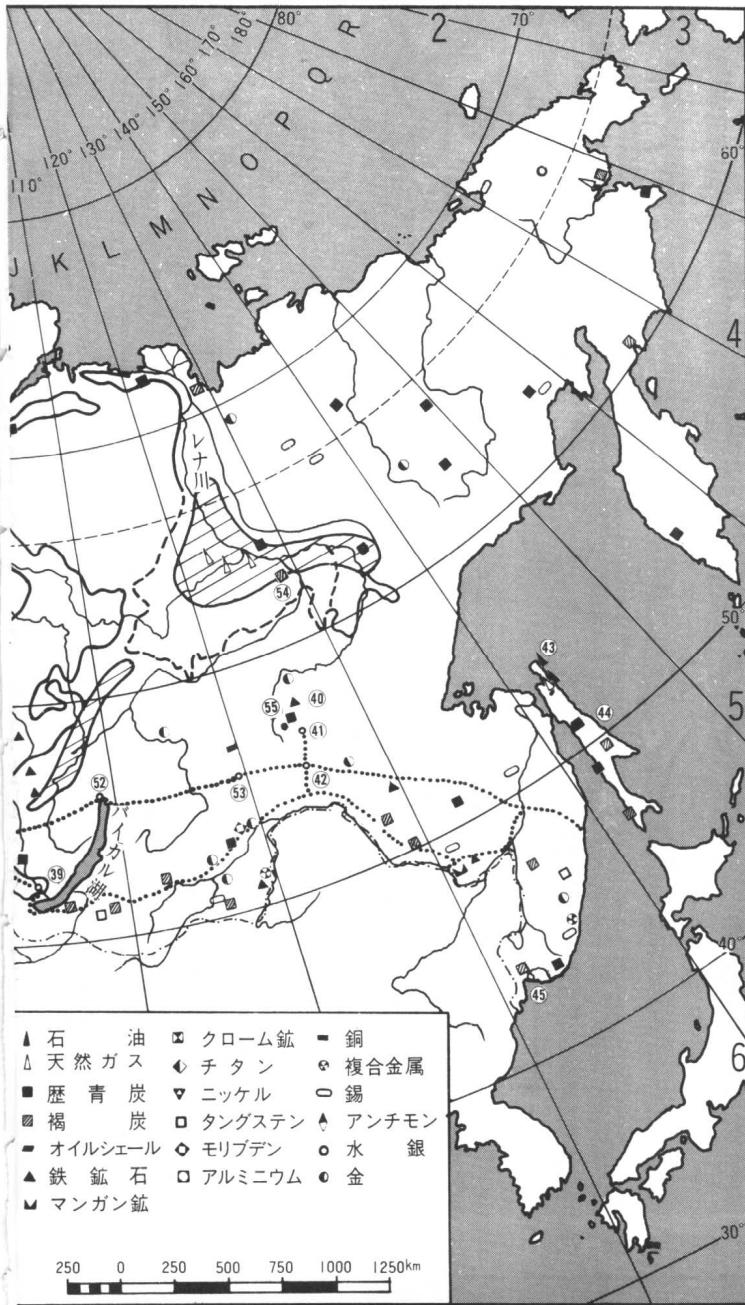
出所:「北海道とシベリア・極東地域との国際交流に関する調査報告書」
(S・48.3) (北方圏調査会)に加筆追加した。

- ① アバカン(6C)
- ② アンガルスク(6D)
- ③ アンジェロ・スジェンスク(5C)
- ④ アルセニエフ(6G)
- ⑤ アルチェム(6G)
- ⑥ アチンスク(5C)
- ⑦ バルナウル(6B)
- ⑧ ペロポ(6C)
- ⑨ ペロゴルスク(6F)
- ⑩ ベルスク(5B)
- ⑪ ビースク(6B)
- ⑫ ビロビジャン(6G)
- ⑬ ブラゴベシチェンスク(6F)
- ⑭ ブラーツク(5D)
- ⑮ ウラジオストーク(7G)
- ⑯ イルクーツク(6D)
- ⑰ イスキチム(5B)
- ⑱ イシム(5A)
- ⑲ カンスク(5C)
- ⑳ ケメロボ(6C)
- ㉑ キーセレフスク(6C)
- ㉒ コムソリスク・ナ・アムレ(5G)
- ㉓ クラスノヤルスク(5C)
- ㉔ クイプイシェフ(5B)
- ㉕ クイズイル(6C)
- ㉖ レニンスク・クズネツキー(6C)
- ㉗ マガダン(4G)
- ㉘ メジドウレチェンスク(6C)
- ㉙ ミヌシンスク(6C)
- ㉚ ナザロボ(5C)



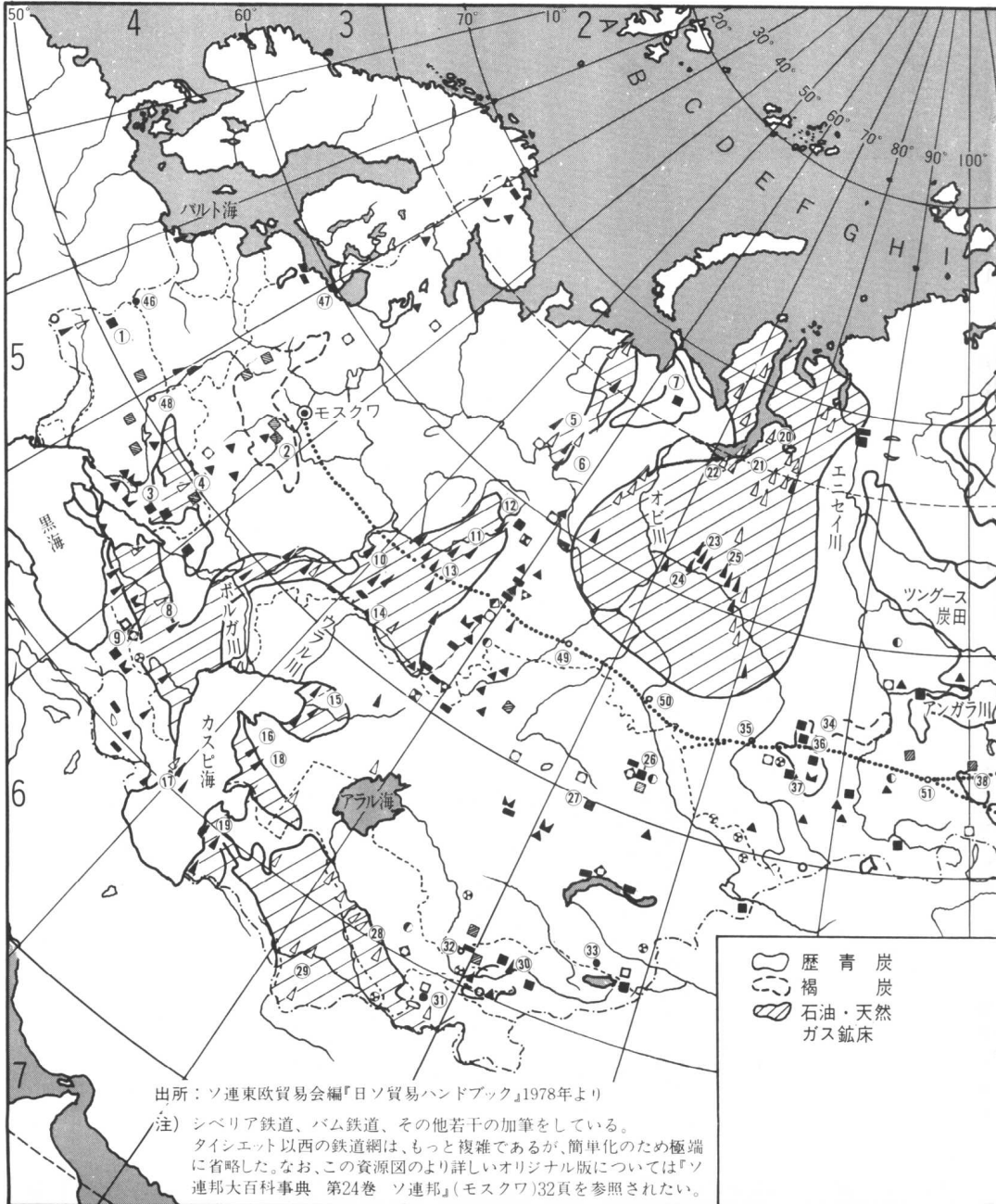
注)1 数字の⑤9までは人口5万人以上の都市(1980年1月現在)

注)2 〇—〇—〇 バム鉄道(詳細は第1部第2章をみよ)



- ① リウフ・ウォルインズ炭田(4B)歴青炭
- ② モスクワ炭田(4C)褐炭
- ③ ドネツ炭田(5C)歴青炭
- ④ シェベリシカ(5C)天然ガス
- ⑤ ウフタ(3E)石油
- ⑥ ウィクトイリ(3E)天然ガス
- ⑦ ベチョラ炭田(3F)歴青炭
- ⑧ スタウロポリ(5D)天然ガス
- ⑨ トキプリ鉱床(5D)主として歴青炭
- ⑩ アルメチェフスク(4D)石油
- ⑪ ニジネタギール・バプロフスキー(4E)石油
- ⑫ キーゼル炭田(4E)歴青炭
- ⑬ トウイマズイ(4E)石油
- ⑭ オレンブルグ(4E)天然ガス
- ⑮ マカト(5E)石油
- ⑯ ジェトウイバイ(5E)石油
- ⑰ バクー(5D)石油
- ⑱ ウゼニ(5E)石油
- ⑲ チェレケン(6E)石油
- ⑳ ヤンプルグ(3G)天然ガス
- ㉑ ウレンゴイ(3G)天然ガス
- ㉒ メドウエジェ(3G)天然ガス
- ㉓ スルグート(3G)石油
- ㉔ ウスチナルク(3G)石油
- ㉕ サモロール(3G)石油
- ㉖ エキバストウズ鉱床(4G)主として歴青炭
- ㉗ カラガンダ炭田(5G)歴青炭
- ㉘ ガスリ(5F)天然ガス
- ㉙ バイラム・アリ(6F)天然ガス
- ㉚ ネフチェアバード(5G)石油
- ㉛ ドウジャンベ(6F)
- ㉜ タシケント(5F)
- ㉝ アルマアタ(5G)
- ㉞ カンスク・アチンスク炭田(4H,I)褐炭
- ㉟ ノボシビルスク(4H)
- ㊱ ケメロボ(4H)
- ㊲ クズバス炭田(4H)歴青炭
- ㊳ イルクーツク炭田(4J)歴青炭+褐炭
- ㊴ イルクーツク(4J)
- ㊵ 南ヤクート炭田(4L)歴青炭
- ㊶ ベルカキット(4L)
- ㊷ ティンダ(4L)
- ㊸ オハ(4N)
- ㊹ サハリン(4,5N)
- ㊺ ウラジヴォストーク(5M)
- ㊻ プレスト(4B)
- ㊼ レニングラード(4C)
- ㊽ キェフ(4C)
- ㊾ チュメニ(4F)
- ㊿ オムスク(4G)
- 1 ㊿ タイジェット(4I)
- 2 ㊿ ニジネアンガルスク(4J)
- 3 ㊿ チャラ(4K)
- 4 ㊿ ヤクーツク(3L)
- 5 ㊿ チェリマン(4L)歴青炭

ソ連邦天然資源図



出所：ソ連東欧貿易会編『日ソ貿易ハンドブック』1978年より

注) シベリア鉄道、バム鉄道、その他若干の加筆をしている。
 タイシエツト以西の鉄道網は、もっと複雑であるが、簡単化のため極端に省略した。なお、この資源図のより詳しいオリジナル版については『ソ連邦大百科事典 第24巻 ソ連邦』(モスクワ)32頁を参照されたい。

第一部 シベリア開発

— 開けゆく大地 —

第一章 開発への総合アプローチ

望月 喜市

I シベリア・極東の自然

ソ連の地図を眺めてみると、北緯四〇度線辺りを南端とし、その大部分は北緯五〇度線以北に、モンゴル、中国、アフガニスタン、イランなどと国境を接して、アジア大陸を東西に延々と広がっている。北緯四〇度線は、日本の岩手を通過しており、五〇度線は、サハリンの中央部を横切っているのだから、日本人の感覚からすれば、ソ連は北海道より更に北の国ということになる。この北の広がりの中で、平野部を二分する形で北から南へ標高一、六〇〇〜一、九〇〇^{程度}のウラル山脈が延び、その南端にアラル海、南西方向にカスピ海が横たわっている。ソ連では、このウラル山脈からカスピ海を結ぶ線の東側を東部地方と総称する。その中には、ウラル地方、カザフ共和国と中央アジアの三共和国、ロシア共和国のシベリア・極東地方が含まれる。

シベリアという名称は、このウラル山脈から太平洋まで（東西最大六、〇〇〇^{程度}）、北氷洋からモンゴル・中国の国境まで（南北最大四、〇〇〇^{程度}）の茫漠^{ぼくぼく}たる広がり（一、二七六万平方^{程度}）を総称する名称として、年代記